原色の街・驟雨

吉行淳之介

新潮文庫

原色の街・驟雨

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草143 A

昭和四十一年十月二十日 発行
昭和四十七年十月二十日 十刷

著者 吉行淳之介

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一一
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

㊐ 印刷・二光印刷株式会社 製本・植木製本所
© Junnosuke Yoshiyuki 1966 Printed in Japan

新潮文庫

原色の街・驟雨

吉行淳之介著

目次

原色の街……七
驟雨……一二九
薔薇販売人……一五九
夏の休暇……一八九
漂う部屋……二一三
解説　日沼倫太郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

原色の街・驟雨

原色の街

隅田川に架けられた長い橋を、市街電車がゆっくりした速度で東へ渡って行く。その電車の終点にちかい広いアスファルト道の両側の町には、変った風物が見えているわけではない。ありふれた場末の町にすぎない。

商家の女房風の女が、エプロン姿で買物籠を片手に漬物屋の店さきに立止まり、樽に入っている白菜を指さきでひっぱって、漬かり加減をしらべている。漬物屋の隣りの本屋では、肥満して腹のつき出た主人が店頭の雑誌にせわしなくハタキをかけていたが、その手をふと止めて呆んやり空を見上げている。空には夕焼雲のほか、何も見えていない。大きな手に握られたハタキが、地面に向ってだらりと垂れている。

本屋の隣りは大衆酒場で、自転車が四、五台、それぞれ勝手な方向をむいて置かれてある。その酒場の横に、小路が口をひらいている。

それは、極くありふれた露地の入口である。しかし、大通りからそこへ足を踏み入れたとき、人々はまるで異った空気につつまれてしまう。

細い路は枝をはやしたり先が岐れたりしながら続いていて、その両側には、どぎつい色あくどい色が氾濫している。ハート型にまげられたネオン管のなかでは、赤いネオンがふるえている。洋風の家の入口には、ピンク色の布が垂れていて、その前に唇と爪の真赤な女が幾人も佇んでい

る。人目を惹くようにそれぞれの思案を凝らせた衣裳にくるまって、道行く人に、よく光る練り上げた視線を投げている。鼻にかかった、甘い声が忍びよってゆく。なかには、正面から抱きついて脂肪のたまった腹部をすりよせながら、耳もとで露骨な言葉をささやく女もある。

地味な衣裳とひかえ目な媚態のうちに用意された肉体は、ここでは数寡いし、それに売れ残るおそれがある。好事家の数が、ここでは比較的少いからだ。多くの男たちは、外観はともかくも、長い航海を終えてようやく陸地に上った舟乗りのような欲望を抱いて、紙幣を掌のなかに握りこんで目的の場所へと進んでゆく。

昭和二十×年春、甚しい不景気で、数多くの人たちには、必需品しか買えない時代であった。

この街に来て、金を払ってゆく男たちの大部分に必要なのは、女である。繊細な趣味のゆきとどいた商品である必要はないし、それにそのような存在はこの街では原色の渦のなかに巻きこまれて、色褪せてしまうのだ。その男たちの目を惹き、足をとどめさせるための作戦としては、この装飾はよく計算されているといってよい。ただ、共同便所の壁の悪戯書きに示されたような欲望を、そのまま受けとめようとする趣は、覆われがたい。

真紅に塗られた唇が、目まぐるしく上下に動いて、白い歯がネオンの灯を螢光色に反射する。肩まであらわな腕が伸びて、ぶらぶら歩いてゆく男の腕を、上衣を、帽子を捉えようとする。男は、無意味な声を発したり、つまらぬ冗談を言ったりしながら、身をしりぞけ、首をうしろに引いて相手の姿をたしかめようとする。やはり、それぞれの好みはあるものだ。そして、そのまま女の方に手繰り寄せられるか、あるいはその手をふり切って別の目標に移ってゆく。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

このように、女と男のありとあらゆる動きが、この街では一つの明確な目的に行き着くためにおこなわれている。

この街の男女関係は、きわめて明晰である。女にとって、この街にいることは、どんなに美しく稀にはういういしく見える女でも、定まった金額で軀を売るという徽章を身につけていることである。従って、女にとっては、自分に向けられる男の視線の中に、「この女は果して自分の申出に応じるだろうか」と迷っている疑わしげな探るような陰湿な好色さを見出すことはない。この街にいるときの男の眼は、支払わねばならぬ金額と引換えに与えられる快楽の量を計っている、ひたむきな欲望の眼である。

男にとっても、眼のまえの女性の好意にみちた眼差しにおもわずほほえみ返したとき、彼女の視線が自分の斜めうしろの人物に向けられていたことに気付いて、行き場のなくなった微笑がそのまま頬に凍りついてしまうとか、街の女とおもって取扱おうとした女性が実は素人の夫人だったとか。……ささやかな、そのくせチクリと棘を含んでいつまでもまつわりついてくる出来事には、この街に身を置いている限り無縁である。

もっとも、そのような感情の動き自体にまったく無縁の人は、数多い。又、この街の性格そのものも、縁遠いことは確かである。しかし、この街の底から、一種の解放感のようなものを嗅ぎ出そうとする少数の人々も存在しているのだ。

あけみという名を付けられて、この街に軒を並べている店の一つに住んでいる女は、その解放

感をこの街から見出すことが出来た。いや、この街からしか解放感を見出すことができぬような立場に置かれた、と彼女自身が思い込んだ時期があったといった方がよいだろう。

そして、彼女自身は、その解放感に惹かれてこの街に身を置くようになった、という弁解を心に抱いている。しかし、そのような契機でこの街を最後に行き着く場所としたこと、言葉を替えれば、そんな動き方をする心を持っていること。……それが、結局は彼女を一層不幸にしてゆくということには、あけみはまだ気付いていない。

しかし、そのことは、やがて気付かずには済まないことだった。

あけみがこの街へ来て、二カ月が経っていた。そして、あけみは日々、遠い気持で軀を横たえていることが出来ていた。それは、あけみが快感を覚えないで、済ませられたからだ。この街へ来てしまったという気持の烈しさが、彼女の肉体を圧しつづけていたのである。男たちは、単に通過して消えてゆく、物質感を与えるだけの存在であった。

しかし、そのことも、そのままで過ぎてゆくものではなかった。

四月のある日、その日は、あけみにとって最初から調子の狂った日だった。

まだ明るいうちに、彼女の部屋にあがった客が、

「きみの名前は？」

と、紋切型の質問をはじめた。

「あけみ」

「それで、本名は？」
と、男が重ねて訊いた。
彼女の気持からいえば、「同じよ」と嘘を答える筈だった。その方が会話をはやく打切ることになって、煩わしくないからである。しかし、このような問は今までになかったので、不意を衝かれた彼女は、
「はな子」
と、本当のことを言ってしまった。
「ふむ、平凡な名前だな」
客は、つまらなそうな顔になった。度の強い眼鏡をかけた、中年の教員風の小男である。彼女は、腹立たしい気分に捉えられた。
この名前には、曰くがある。
空襲で爆死した父母の若い日の追憶が、その名前に絡まっていた。空襲によって境遇が一変するまでは、中産階級の家庭の一人娘として育ち、女学校も卒業し、ありふれた安穏な生活であった。若くて一緒になった父母の結婚三年目に生れたのが彼女で、あれこれ考えぬいた挙句、赤児の名前に窮した両親は彼女をはな子と命名した。……犬ならばポチ、人間の女ならばはな子、その徹底した平凡さの持っているニュアンスにたいして、若やいだ、やや衒いの気分の混った悪戯っぽい好感を抱いて。「男の子だったら、太郎となったわけよ」と、後日母親が回顧的な表情で彼女に告げたことがあった。

魚谷はな子、それが、あけみの正確な姓名である。

あけみ、それはこの店の女主人が命名した、娼婦としての彼女の名である。大柄で異国風の派手な顔立ちをしていたため、アンナと名を付けられた女があった。その女は、容貌に似合わぬ気弱な性質で、「アンナなんて名前を付けられちゃって」と、その名を押し脱ぎたいような恰好に身を捩りながら、あけみに訴えていたが、間もなく身のまわりのものを持って人知れず逃げ出してしまった。もちろん、名前だけのためではない。

さて、あけみの本名を訊ねたその教員風の小男は、たいへん執拗だった。

その夜十時ごろ、何人目かの客を帰して、あけみは鏡台に向い乱れた髪をととのえていた。

彫の深い、眼の大きい痩形の顔に、さまざまの疲れの翳がさっと一刷毛はかれて、鏡の面に映っていた。露地の入口から三つ目の曲り角にある、ヴィナスという家号のこの店に来てから、ほとんど太陽の光の下に出ないためもあって、小麦色の膚にはうっすらと澱んだ色もあった。しかし、それはまだ、娼婦の顔にはなっていなかった。

娼婦の顔。……それは、職業によってあらわれてくるものばかりではない。その原型は、どんな富裕な家庭の女性にも、屢々見受けられる種類のものだ。しかし、娼婦という生活の形態が、その場所に置かれた女の中から奪ってゆくもの、女の中に付加えてゆくものによって、一種特有の顔が逃れる術もなくどんな女にも次第に浮び上ってくるのである。

あけみは、上唇の剝げた口紅を下顎の歯の裏でちょっとしごいてから、わざと橙色の口紅を選んで、濃く塗りつける。口紅の色と皮膚との対照で、顔全体がにわかに安っぽい感じに変えら

れてゆく。
黄色い電灯の光に、口紅の厚い層がギラギラ閃って、濡れた官能の色を顔のすみずみまで放射しているように思えてくる。
あけみは、自分にたいして悪意にみちた気持になってゆく。と同時に、淫靡な心も、彼女の意識の下でかすかに一瞬ゆらめくのである。多くの男との肉体だけの交渉が、やはり、あけみの軀の未熟さを次第にとり除いてゆき、今では実った肉が皮膚の内側に在った。それを、あけみは、はっきりと意識に上らせていない。かすかなおののきが、軀を掠めて過ぎてゆくときにも、彼女の心はたちまちそれを不快な身慄いにすり替えてしまうのだ。
結局、あけみは化粧によって変貌したあまり見覚えのない顔の裏側に、身を隠して、客の前にあらわれることになる。

娼家の女の部屋には、概ね、扉に鍵がついていない。あけみの部屋の戸を開けて、春子が入ってくると、傍に膝をくずして坐り、
「ねえ、いまのお客、とっても可笑しな男ったらないのさ」
と、話しかけてきた。
あけみは、自分の過去は他の女たちにも言葉を濁して話さないのだが、このよく肥って手の甲の指のつけ根にえくぼの見える十九の娘は、なにか理解に苦しむ事柄に遇うと、いつもあけみのところへお喋りをしに来る。色白で肌目がこまかいが、扁く陰翳に乏しい顔で、小柄のくせに手

足が大きく、乳房は思いきり大ぎくふくらんで、乳首には暗紅の広い暈がある。

軀のすみずみまで肉付きのよい春子は、この街の生活もさして苦にならずにそのまま受け入れているといった型の女である。この家の主人が街の各処に持っている合せて五軒の店に働いている女たちのうち、稼ぎ高の一番多い女が春子だ。彼女はそのことが得意で、客に自慢したりする。春子の腕を飾る金の輪は、贋物ではないし、小型の電気蓄音器も持っている。

稼ぎの良い女は、所謂ママさんからも嫌な顔をされず、春子の毎日は概ね楽しそうである。例えば客に、「きみ、辛いこともあるだろうな」と訊ねられると、先週の稼ぎ高が朋輩の蘭子に上を越されて二番目に落ちたことを思い出し、「春子ほんとに口惜しかったわア」と甘い声でささやいたりした。又、「きみの愉しみは何だい」などと言われると、「気に入った客を取ったときよ。これであすの朝まで、ゆっくり、騒いだり、歌ったり、レコードかけたり出来ると思うと、ほんとに嬉しいわ」と答えるのである。馴染の客の顔を見詰めながら、「今度あなたが来るときは、何をご馳走してあげようかしら?」などと呟くこともある。

このような春子の態度は、不安や寂しさを、狂躁にさわぎ立てることによって誤魔化しているのではない。春子の意識が、決してこの街の生活の範囲からはみ出すことがないためなのだ。

春子の話を聞いていると、露骨な下卑た言葉にたいしてのためらいは認められない。どんな言葉も、彼女にとっては同じ活字箱に入っている。

あけみの傍に坐った春子の口から、露骨な話題が出はじめた。「ねえ、いまのお客、とっても可笑しな男ったらないのさ」という文句につづく言葉を、そのまま書き記すことは出来ないが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton